

沖ノ鳥島の経済効果

海洋島

利用が広がるパヤオ

4月9日～15日の間、小笠原水産センターでは、漁業調査指導船「興洋」により沖ノ鳥島で調査を実施しました。調査内容は、①魚礁調査、②底釣調査、③礁内調査です。①の魚礁調査では、都が平成19年に設置したパヤオ（中層浮魚礁）3基（北東沖、東沖、西沖）の周辺で漁獲調査を行いました。調査内容は、いましました。カツオの平均尾又長は45cm、体重1.8kgでした。この時、カツオ17尾、メバチ13尾、キハダ1尾の計31尾に標識（黄色のダート型タグ）を付けて、

②底釣調査は11、12日に実施しました。結果、ナンヨウキンメ18尾（平均体重1.4kg）、キララギンメ15尾（平均体重1.2kg）、バケアカムツ2尾（平均体重5.2kg）などが漁獲されました。そのうち、ナンヨウキンメ雌の生殖腺



魚体への標識取付作業(興洋船上)

〒100-2101
東京都小笠原村
父島字清瀬
電話04998-2-2454
E-mail: kaiyoutou@tokyo.ema
il.ne.jp

放流しました。その後、静岡県水産技術研究所と三重県水産研究所から相次いで、カツオ標識魚再捕の報告が寄せられました。これまでに再捕されたのは3尾です。1尾は、静岡県御前崎港に水揚げされた中に発見されました。水揚げしたのは、三重県の竿釣船で、沖ノ鳥島の西沖パヤオ付近で操業した時のものだという事です。また、残り2尾は、三重県和具漁港に水揚げした三重県の竿釣船で、1.8kgと1.3kgの2尾でした。やはり、沖ノ鳥島の西沖で漁獲したこのことでした。沖ノ鳥島ではパヤオ設置以前より、島の周辺にはカ

パヤオへの蛸集効果は

いしゅう

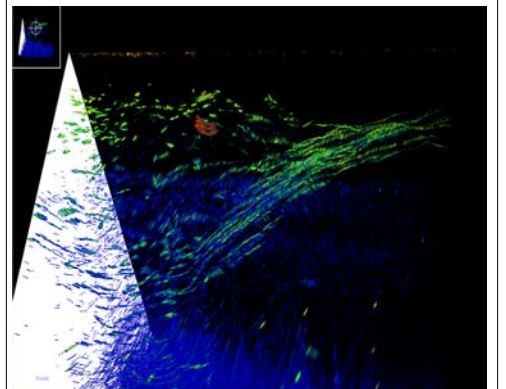
魚がパヤオ設置により、蛸集されたためだと思われれます。多くのカツオがこの魚礁に付いていることが分かり、今回、初めて、島の沖合3カ所に設置されたパヤオで、標識放流をおこないました。報告を受けた再捕位置から、放流後も遠くには移動していなかったことがわかりました。また、現在では、数多くのカツオ竿釣船がこの沖ノ鳥島のパヤオ周辺で操業し、パヤオを利用している実態も明らかに なりました。島しょ農林水産総合センター八丈事業所

が行った聞き取りから、千葉県勝浦漁港に沖ノ鳥島産のカツオが数多く水揚げされていることがわかり、多くの漁船が利用しているものと思われれます。パヤオでは、その他に、興洋に搭

載されている、マルチビームソナーを使用した音響調査も実施しています。右図は、沖ノ鳥島西沖のパヤオを調査した時のものです。得られたエコーを南から見て表示しています。表示範囲は、縦は200m、横は東から西へ約560mです。中央やや上の、赤い部分が魚礁のフロート（上図、緑色のウキの集合体）部分で、水面下34mにあることが確認されました。その周辺に映る緑色の線状の部分が、魚群になります。フロートの周辺部に数多く集まっている様子が捉えられています。近年、日本沿岸では、カツオが不漁と聞いています。沖ノ鳥島でのカツオ漁は、今後さらに重要性を増すと思われます。



設置されるパヤオ (写真:五洋建設)



マルチビームソナーのエコー

ケアカムツ2尾 (平均体重5.2kg) などが漁獲されました。そのうち、ナンヨウキンメ雌の生殖腺



②底釣調査は11、12日に実施しました。結果、ナンヨウキンメ18尾（平均体重1.4kg）、キララギンメ15尾（平均体重1.2kg）、バケアカムツ2尾（平均体重5.2kg）などが漁獲されました。そのうち、ナンヨウキンメ雌の生殖腺



ち、ナンヨウキンメ雌の生殖腺熱度指数(KS値)は、平均4.0、最大7.6と高い値であったことから、この時期が産卵期ではないかと思われ ます。今後 も調査を継続していき ます。

放流しました。その後、静岡県水産技術研究所と三重県水産研究所から相次いで、カツオ標識魚再捕の報告が寄せられました。これまでに再捕されたのは3尾です。1尾は、静岡県御前崎港に水揚げされた中に発見されました。水揚げしたのは、三重県の竿釣船で、沖ノ鳥島の西沖パヤオ付近で操業した時のものだという事です。また、残り2尾は、三重県和具漁港に水揚げした三重県の竿釣船で、1.8kgと1.3kgの2尾でした。やはり、沖ノ鳥島の西沖で漁獲したこのことでした。沖ノ鳥島ではパヤオ設置以前より、島の周辺にはカ



(上) 沖ノ鳥島付近を航行するカツオ竿釣漁船。(下) 沖ノ鳥島には海鳥も多く飛来するようになった。